

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	檜山 満照
論文題目	漢代美術と四川の地域文化
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、漢帝国の一元的支配秩序に組み込まれた四川という一地域の造形文化のあり方を、銅鏡、画像石、石闕など後漢時代の美術作品と文字資料に基づいて考察したものである。従来の研究が、四川の地域的な独自性の実証に偏る傾向が強かったのに対して、都の置かれた中央の政治的、思想的動向や、陝西をはじめとする他地域の様態とどのように相関したかというところに視座を置いた点が、本論文の特色として注目される。そこで取り上げられているのが（一）銅鏡の生産・流通体制、（二）漢代の礼教主義と造形美術にあらわれた図様との関係、という二つの問題であり、それぞれ第一部「銅鏡の生産体制と官営工房の動向」、第二部「漢代画像と儒教の礼教主義」において、綿密な論が展開されている。</p> <p>まず、先行の諸研究の達成に対する本論文の位置づけを、問題設定および方法の提示を通して述べた緒論に続き、第一部では漢代の美術を代表する後漢の銅鏡を取り上げ、四川の広漢郡の製作であることを銘文に明記した一群の作品を題材として、銅鏡の生産と流通における中央と地域の関係のあり方を三つの章にわたって論じている。最初に第一章「広漢郡製作の紀年鏡の資料的意義」で、広漢郡製を謳った作品として探索し得た計二十面について各々を精査し、資料性を検討している。そして、これらが元興元年製と桓帝・靈帝代製に二分されること、両者の間に四十年近い空白期があること、製作地四川では出土しないという顕著な特徴があることに注目し、第二章「広漢郡製作の元興元年銘鏡の製作事情」および第三章「桓帝・靈帝代の作例の製作事情」で、紀年と分布地の示す特異な偏りの要因が考察されている。</p> <p>これらの銅鏡は、銘文に中央の官署「尚方」と一地方である「広漢」の名が併記されているが、檜山氏は、両者はともに御用器の製作・調達を担当する官営工房として併存し、尚方の発注を受けて広漢郡工官が製品を物納する体制にあったとの見解を提示する。そして、宦官勢力の伸張に伴って一世紀末頃には尚方が彼らの保護管理下に置かれ、宮中への献上などに供する奢侈品の一つとして広漢郡工官で製作された銅鏡が用いられたことが、元興元年銘の集中の要因であり、その後の紀年銘の空白期は、延平元年以降、鄧太后が度々発布した儉約令を受け広漢郡工官で上輸品の製作が止まったことに起因すると論じた。さらに、桓帝代に官営工房が復興し靈帝代に未曾有の活況を呈するに至った中央の動向が、二世紀中頃以降の紀年銘の偏在をもたらしたことを明らかにしている。こうして第一部では、史書には記されない官営工房の生産活動の消長、ことに中央の政局と連動せざるを得ない地方工官の動向が、銅鏡という美術品を通してきわめて具体的に解明されている。結果として、漢代の四川の美術が実は中央との強い関係性のなかにあったことを明らかにした点に、特に意義が認められる。</p> <p>続く第二部においては、儒教の聖人をあらわす画像を分析の対象としている。その第一章「四川における「聖人」の一表現」では、四川出土の三段式神仙鏡の図像解釈を通して、この地に生きた後漢の人々の志向した理想的世界観の様相を明示することが試みられている。特異な説話的図様をあらわした当該形式の鏡については、これまでも諸氏による図像解釈が提示されてきたが、檜山氏は四川省邛崃市、綿陽市の現地調査で見出した新出資料に基づき、下段の主題を聖帝堯が舜に二女を娶らせる場面と新たに明快に同定した。その上で、二女には婦道の模範的实践者としての役割が与えられていたことを論じている。更に、それらの人物が神仙の定型表現である羽翼を具すことを指摘し、四川地</p>	

域では上古の聖人をも単なる勸戒的存在ではなく、西王母のような神仙的性格が付加された存在と見なされたことを指摘する。従来の解釈に根本的な見直しを迫る重要な見解であり、第二部での考証の端緒となるものであるだけに、丁寧な分析が行われている。

ついで第二章「漢代画像にみる聖帝像の機能」では、四川に限定せず漢代全体での聖帝像の意味づけをおこない、漢代において聖帝像は新たな秩序の創出、安定した地上世界の表象として機能したとすると同時に、仙界との強い結びつきを見せる四川画像の特徴にあらためて注意を喚起している。そして第三章「仏教受容前夜の四川」では、後漢の四川地域で展開した宗教観、死生観を更に検討する題材として、この地の初期仏教図像を取り上げるとともに、四川各地に現存する石闕を素材としながら墓葬美術における聖人像の機能を探る。考証に際して従来看過されていた羽翼の表現に着目した点は慧眼というべきで、儒教的徳目の実践によって仙界への昇仙が約束されるというこの地の死生観の特徴を明確に浮かび上がらせた。すなわち、後漢の礼教主義は儒教的な実践を国家として奨励したが、四川地域はそこに神仙思想を混在させ独自の表現を生み出したとする。他地域に先駆けた仏像の受容もこうした土壌の所産であることを論じるのである。最後の第四章「漢代画像石にみる荊軻刺秦王図—義士の英雄化と神仙化の契機をめぐって—」は、各地における本図の作例を比較検討し、儒教的徳目の実践者である荊軻の物語が儒教的な礼教世界で広く受容されながらも、図様にはバリエーションが認められ、特に陝西省北部では荊軻の義挙が昇仙の実現と関連づけられたと見なせる図様がおこなわれたことを論ずる。そこに中央を介さない四川との地域間交流の存在が推定できるとする指摘は重要である。

如上の性質の異なる二つの切り口を通して、漢代美術という総体を中原ではなく四川という一地域の視点から、中央との関係性のあり方を軸に具体的かつ詳細に描き出すことに成功しており、そこに本論文の意義を認めることができる。これはまた、銅鏡や石闕に関する地道で丁寧な実地調査の成果を基盤に置いたものであり、この点についても高く評価したい。もっとも、本論文は四川地域からアプローチしたケーススタディであり、圧倒的な質量をもつ漢代美術に迫るには、今後もなお多くのケーススタディを要しよう。また、特に第一部の銅鏡に関して、図様や意匠に則した美術史的分析にも触れてほしかったとの意見も出された。今後の研究の進展によって補われることが期待される。

以上、本論文の達成について、審査委員会は一致して博士（文学）の学位を授与するに値するものであると判断した。

公開審査会開催日	2013年 6月 22日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	肥田 路美
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	内田 啓一
審査委員	成城大学・教授		小澤 正人
審査委員			
審査委員			